

駅周辺施設の再整備が地域住民の意識変化や行動変化に与える影響に関する研究 ～南万騎が原駅を対象として～

横浜国立大学 大学院 都市イノベーション学府 学生会員 ○樋口智大

横浜国立大学 正会員 中村 文彦

横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院 正会員 田中 伸治

横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院 正会員 三浦 詩乃

横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院 正会員 有吉 亮

1. 背景

近年、人口減少や少子高齢などの社会課題が危惧されている日本では、今後のまちづくりにおいて、駅が果たすべき役割もより重視されるようになってきている。また機能の一つとして、駅は地域住民の日常生活の一部としてどのように貢献していけるかを考慮していくことが求められる。

2. 既往研究

既往研究では、Kevin Lynch の都市のイメージをはじめとして、人々が認識するまちの構成についての研究や、まちのあり方と人々の地域愛着・日常行動に関する様々な研究が行われてきた。

既往研究を参考に、住民は日常生活において、まちが良くなっている気がするという心境に関する意識印象変化・まちなかで活動するという行動変化・まちに対する愛着に関するシビックプライドの変化・住民同士の間で起こる地域コミュニティの変化という 4 項目に注目し、本研究である駅再整備と 4 項目との繋がりがパス図に起こすと図 1 のように表された。しかし、既往研究ではこれらのパスを体系的に捉えて、まちづくりと住民の反応を評価した研究は見られない。

3. 研究目的

本研究では南万騎が原駅の再整備事業を取り上げ、既往研究で取り上げられた要素を体系的に考慮しつつ(図 1 参照)、周辺住民の方々の中で、その再整備によってどのような変化が起きているのか、そのプロセスを知ること・また再整備された駅周辺施設が周辺地域においてどのように認識されるようになっているか明らかにする。

今回、図 2 に示すように再整備事業を通して住民が起こした行動変化と意識・印象変化について着目した。そこで、行動変化を起こしては本人がまちの変化を体感したり、他人が起こした行動変化を目視したりすることで、まちそのものに対する意識・印象変化が起きることその際に、まちイメージの植え付けが起こっているという仮説を立てた。

4. 分析手法

図 2 のパス図を示すため、図 1 中の 4 項目に関する質問 15 項目を五段階評価によるアンケート表を作成し、加藤(1996)が用いた空間意識図の手法を用いた。駅前広場に滞留している方々を対象にして、1 月中の午前中から昼間にかけて 7 日間調査を行った。その調査結果から、重回帰分析によるアンケートの質問で取り上げた質問項目同士の関係を考察した。本研究における分析方法として、既往文献より図 1 で示しているパスの枠組み自体に大きなずれはなく、研究目的で示したパスを特定していくため重回帰分析を今回用いた。そして住民の意識や行動の変化とまちづくりコンセプトイメージの浸透具合の関係性を明らかにするために図 2 のパスを満たしているとされる人々のアンケート回答結

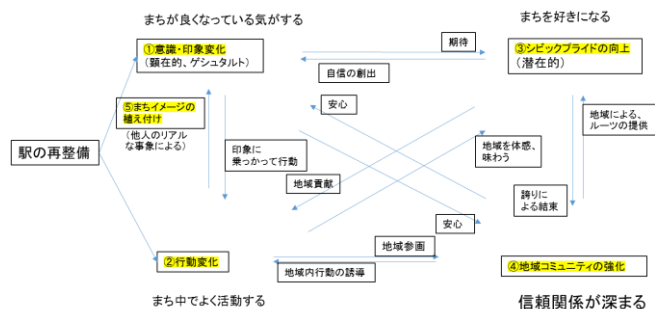


図 1 コンセプトイメージが浸透していくフロー

キーワード：都市イメージ、駅・駅周辺施設再整備、地域住民、日常生活、少子高齢、立地適正化計画

連絡先：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5 横浜国立大学交通と都市研究室 TEL 045-339-4039

果を比較した。再整備事業内容の特定を図 3 に記載している「みなまきラボ・認可保育所・小児科病児保育所の設置、商業施設や広場・木陰空間や高齢者住宅、街路樹や歩行空間の再整備」という 8 事業に特に着目した。

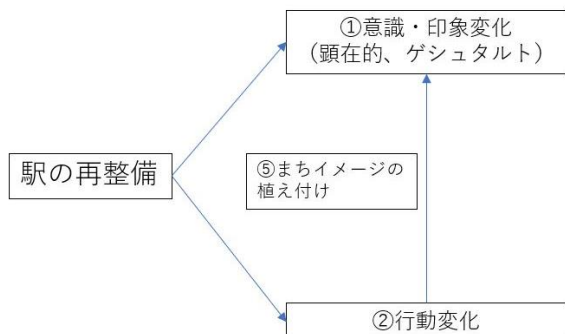


図 2 再整備事業によりイメージが植え付けられるまでのパス



図 3 8つの再整備事業

5. 結論

30 代以下の住民間では、駅・駅周辺施設利用の頻度の高い人たちにおいては施設利用に対してメリットを感じている場合 ($R^2=0.334$ 、標準化係数 0.322)、40 代以上や再整備事業前から駅周辺にいる住民間では、駅周辺施設利用をしている人で駅周辺地域において住みやすさを実感している場合に (40 代以上について $R^2=0.249$ 、標準化係数 0.401、整備前から住む人について $R^2=0.262$ 、標準化係数 0.462)、まちづくりイメージがより強く浸透が確認できることが明らかとなった。またその流れを促進するために効果的な再整備事業として、重回帰分析によって分類したカテゴリー別の五段階評価結果比較により前者はみなまきラボ、病院、歩行空間が、後者は商業施設が特定された。30 代以下の住民に対するグラフは図 4 のようになり、その集合の中でも仮説にあたる質問項目を満たしている人々がまちのイメージをより実感していることがわかる。ま

たこのグラフからは、病院や歩行空間が施設利用をしている人よりもそうでない人の方が高い評価を示しており、都市の機能として需要があるものが評価されているものの実際に利用している人からは評価されていないことがわかり、そのサービスの内容に課題がある可能性が考察される。さらに空間意識図による分析により、現在、駅・駅周辺設はまちの中でも多世代間交流が生まれるエリアとして認識されていることが明らかとなった。

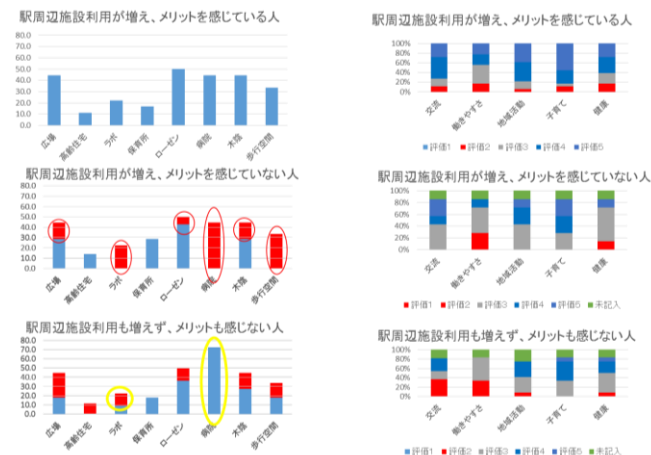


図 4 30 代以下の住民の五段階評価の結果とコンセプトイメージに対する評価

6. 謝辞

本研究はみなまきラボの皆様、株式会社相鉄ビルマネジメント・相鉄ホールディングス株式会社の皆様には多大なるご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) Lynch Kevin. : 都市のイメージ., 1960
- 2) 伊藤香織. : 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか - 今治市を事例とした実証分析., 2017.
- 3) 加藤仁美. : 「空間意識図」による住民の共通な環境イメージ : 都市・農村のマージナルエリアにおける都市化の構造と環境計画 第2報., 1996.
- 4) 谷口守、芝池綾、松中亮治. : 意識調査に基づくソーシャル・キャピタル形成の構造分析 : 地域への「誇り」や「信頼」がもたらす影響., 2007
- 5) 鈴木春菜、藤井聡. : 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究., 2008

キーワード : 都市イメージ, 駅・駅周辺施設再整備, 地域住民, 日常生活, 少子高齢, 立地適正化計画

連絡先 : 〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5 横浜国立大学交通と都市研究室 TEL 045-339-4039